



妻から見た研究留学^{*1}

- CE-CERT研究留学体験記 番外編 -

Visiting Research from a Wife's Point of View

- Visiting Research on CE-CERT Extra Chapter -

萩野 文^{*2}

Aya HAGINO

1. はじめに

夫がアメリカに研究留学するに伴い、妻として夫と共に渡米し、1年間の研究生活をここ、カリフォルニア州リバーサイドで過ごしてきました。直接、夫の研究に関わることはないけれど、日々研究に明け暮れる夫を見てきた妻の視点から、こちらでの研究生活の一部をご紹介します。

2. 書類遅延の意外な理由

こちらで生活をしていく上でもっとも必要とされる能力。そして多くの日本人は苦手とする能力。それは自己主張。アメリカ生活に慣れるまでにいちばん苦労したのはそこだったのではないのでしょうか。留學生活で待ち受けていたカルチャーショック満載の手探り留學生活は、実は渡米前から始まっていたのです。

2006年8月。VISA取得のために必要な書類を受けとるのに非常に時間がかかり、予定通りに出国することすら危ぶまれる事態になったことは、以前、夫が広場に投稿させていただきました(自動車研究 第8巻 第12号53, 54頁)。このとき、当該部署に直接電話をかけて督促することで事なきを得た訳ですが、先方に書類作成を依頼し始めたちょうど一年後、この地で重大な事実気がつかしました。それは.....バケーション。

そうです。アメリカでは学生は6月半ばに卒業式を終え、8月エンドまでの長い長いバケーションを迎えるのです。それに伴い、職員達も適当なタイミングでそれぞれが休暇を取っています。そう、1年前に1ヵ月近くも連絡が来なかったのも、書類の作成に時間がかかっていたのも、すべてはバケーションのせいではなかったのでは、という疑惑が浮上してきました。書類が回るそれぞれの部署でそれぞれの担当者が思い思いに休みを取っているのですから、タイミングが悪ければ書類が行く先行く先の各部署全てで担当者不在、ということもありえるわけです。休暇を取るときは担当の仕事他の人に頼んで、というあたりまえのことがなされていなかっただけとは、はた迷惑な話です。

結局、当時、思うように手続きが進まなかったのは、先方が多忙なのではないかという心遣いと、バケーションだからとはいえ担当者がいないだけで仕事がストップするという事態を考慮に入れていなかった日本人の勤勉さが裏目に出ってしまったということでしょうか。

今となっては、担当者が自分の休暇のせいで処理が遅れたことへの謝罪もなく、むしろ逆切れされてしまったことも、どこかに埋もれていたであろう書類が電話一本であっさり処理されていったことも、すべては文化の違いだったんだと笑って受け止められるようになりました。

必要なことはどんどん主張し、ただ待つよりも積極的に二重三重に手を打っておく、それがアメ

*1 原稿受理 2007年8月10日

*2 編集部注：筆者はエネルギー・環境研究部 萩野浩之副研究員夫人

リカで快適に生活するコツのようです。

3. ミーティングよりも日々のふれあい

毎日実験のことを考えて暮らしているこの生活。忙しくも代わり映えのしない毎日ですから、当然、日々の実験の進行状況(?)も夫婦の会話に盛り込まれてきます。

さて、話を聞いていると、どうやら夫はCE-CERTで実験をしている学生さん達と共同で使っているチャンバーの実験のスケジュールがいまいち把握しきれず少々困惑気味のよう。でも、夫のお邪魔している研究所のグループでは木曜日の朝がミーティングタイムだと聞いています。ミーティングで実験計画や結果報告、今後の進め方を議論するのは?と素人妻は思うわけですが、どうやらミーティングでは特にレジユメがあるわけでもなく、メンバーの大半が欠席などということも日常茶飯事であり、どうも腰を据えて議論する場ではないようです。また、夫のいるCE-CERTはキャンパスから離れた場所に位置しており、学生は自分の研究に合わせて授業後や休日などに不定期で現れるとのこと。かくして夫は、いつ現れるのかわからないチャンバーのスケジュール管理をしている学生を捕まえるのに苦労しながら、実験計画を練っていました。

せっかく定例ミーティングがあるのに、なんだか効率悪いような気がしますが、これがアメリカらしいスタイルなのでしょうか。いずれにせよ、やりたいこと、聞きたいことを自分からコミュニケーションしていかないとどんどん取り残されてしまうのですから、ここでもやはり決め手になるのは自己主張ということになるのでしょう。

4. 夫の変化

私の偏見かもしれませんが、“典型的な”アメリカ人は人の話を聞かないように感じます。ましてたどたどしい英語で、ゆっくり正確に話そうと努める日本人の言うことなど待ってはくれません。

私が夫の変化を感じたのは渡米して3ヵ月もたったころでしょうか。二人で会話をしても夫の言うことを聞き返すことが多くなった気がしたのです。普段は比較的ゆっくりと、考えながら話

す夫。しかし、何故だか夫の言うことがよく聞き取れなくなってきています。

原因はそう、早口。注意して聞いていると、いつの間にか以前よりもずいぶん早口になっていました。夫曰く、「話しているときに文章の途中で止まるとこっちの人はきいてくれなくなるので一気に話すように心がけている。」とのこと。なるほど。拙い英語なりに、相手に理解してもらう術を模索中の夫。その努力が垣間見え、特に突っ込むことなく心の中でエールを送った妻であります。そのことにより、夫婦の会話に温度差ならぬ速度差が生じたのはまた別の話。

5. 工具求めて1週間

さて、夫の研究に必要な装置が日本から届いて落ち着いた頃、夫に細い六角レンチがないかと尋ねられた。大型ホームセンターのHOME DEPOTや他のDIY屋さんにもなく、インターネットでも見つからないと言います。それならば当然こちらで手に入りづらいのはミリだろうと思って「何ミリ?」と尋ねたら、「ミリじゃない、インチ。」と言われました。

なぜインチの六角レンチがアメリカで見つからないの???

謎です、アメリカ。日本では夫が求めていたものは東急ハンズやインターネット通販で手に入り、実に便利です。国土も広く、交通の便も良いわけではないアメリカ。この国こそネット通販がもっと広まるべきだと思うのですが.....

結局はこちらの地元の人に教えてもらった工具屋さんに行って無事に見つかりましたが、とても外からでは工具屋さんとは気付かない建物(図1)。しかも、最初に来店したときには在庫がないと断られてしまいました。その後、もう一度電話で在庫を確認し、再度来店。にも関わらず、またしても「そんなものはない」と言われましたが、「あなたが電話であると言ったんだ。」と伝えたらもう一度探し始め、挙句に「俺が見つけてやったぜ!」なんて言われてしまいました。なんともいい加減な人もいるものです。そんな感じで、こちらの生活に慣れるまでは工具ひとつ手に入れるのにも一苦労で、ずいぶん時間がかかってしまいました。



図1 特殊な工具を揃えている大学近くの工具屋さん。目立った看板も無く、近隣のオフィスビルも非常に分かりにくい。

6. 日本人同士だからって

夫が使っている装置の代理店から人がこちらに来たと言う話がまだ耳に新しい頃。また日本人のメーカーさんが来たと聞きました。でも、よくよく聞いてみると、今度は夫がお邪魔しているCE-CERTが所有している装置を見に来た人だとか。つまり夫の担当装置ではないということ。でも、夫が電話対応や修理の立会いをしていたような……？

そう、CE-CERTの装置担当の学生さんは、日本人のメーカーさんの対応を夫に任せてふらふらとどこか行ってしまい、装置が直ったところに再びやってきて、当たり前のようにその装置を使い出したそう。日本人がいるなら日本人に世話してもらえばいいという考えなのでしょう。もちろんこちらが協力できることは喜んで助け合います。ただ、まったくの任せ切りというのは、また装置の調子が悪くなったときなどに、後々本人が困ると思うのですが、そういう発想はないようなのが不思議です。もちろん全てがすべてそういう人ばかりではないですが、どうも夫は、典型的なアメリカ人に振り回されているような気がする妻なのです。

7. 敵はギャングのみならず

さて、夫は毎日、その日仕入れた情報を提供してくれます。

「最近、大学のキャンパスでシューティングがあったらしいよ。」

「キャンパスからちょっと離れた駐車場で強盗があったらしいよ。」

実にアメリカっぴいのです。特に夫が行っているUC Riversideはフリーウェイの出入り口が近いの

でささっと銃で襲ってささっと逃げられるため、キャンパスから離れた暗い駐車場や、駐車場に行くまでの道はかなり狙われやすいようです。

女性の学生さんなどは、夜遅くなるとガードマンに駐車場まで送ってもらえるサービスを利用しているようです。でも、こういう話題も慣れてくると日常茶飯事なのでネタにもなりません。

でも、とある日のネタは一味違いました。

「CE-CERTの近くでココートを見たよ。」

勘弁してください。夫が撃たれるのも困るけど、ココートに襲われるというのも何だか嫌です。対処しようがないですし。ちなみに私達が住んでいるアパートメントの周りでもココートが出るらしいです。

とにかく、ここは病院に行っても“迅速”に“まとも”な手当てをしてもらえるかどうか疑わしいアメリカです。夜遅くに駐車場に行くときは、強盗にもココートにも襲われないよう、細心の注意を払って欲しいと願う妻です。

8. 自分の身は自分で守る

さて、ご周知の通り、自分の身は自分で守らないといけないのがアメリカ。

性格なのか、自動車教習が必須でないからか、交通ルールを守らない人もよく見かけます。また、道幅が広いおかげで接触せずに済んでいるだけの危ない運転の方も多そうですね。

先日出かけた折、夫が運転で信号待ちをしていたときのこと。私はリアシートに子供（もちろんチャイルドシート使用）と一緒に乗っており、一台前の車に続いて発進したな、と思ったら突然の急ブレーキ。驚いて前方を見たら、赤いRV車がかなりのスピードで、前の車とうちの車の間をすり抜けるように左から右へ走り去って行く姿が目に入りました。

「どうしたの？」

「信号無視。」

「え？うちが？」

「いや、向こうが。」

って、今の車、軽く100km/hは超えているスピードでしたよね??

夫曰く、こちらが青信号になったけど実験のことを考えていてちょっと出るのが遅かったからぶつからなかったとのこと。いつもは「危ないから運転中

に研究のことを考えるのは止めてね。」と言いながら送り出す私ですが、このときばかりは研究熱心な(?)夫でよかったと胸をなでおろしました。

それにしても信号無視の車、信号手前でもスピードを緩める気配がまったくなかったようです。うっかりなのか確信犯なのか。あの車、上り坂だったのにずいぶん頑張ってたよね、と笑って話せるのも無事だったからこそできることですから。

アメリカでは特に、自分が悪くても謝ってくれる人は少ないというのは有名な話。日本でも言えることですが、自分が事故を起こさないように注意するのはもちろんのこと、事故をもらわないよう気をつけることが、ひいては自分の身を守ることに直結するのだと改めて実感させられた出来事でした。

ちなみに、アメリカでは特に注意書きが無い限り、赤信号で一時停止した後左折することは許されています。最近では信号での一時不停止のための自動違反取締装置(図2)の設置された交差点が増えています。



図2 信号での一時不停止のための自動違反取締装置(信号機の表札下)。方向指示器を出さずに曲がる車も多く見かけるので、規則以前に人に心配りの出来る運転マナーを持って欲しい。

9. 終わりに

夫と共に過ごした一年間のアメリカ研究生活は本当にあっという間でした。生活を預かる身として考えると、外国に引っ越してきて生活を軌道に乗せるというのは思っていた以上に時間のかかるものだったというのが、渡米前に思い描いていた予想との一番の違いだったかと思います。また文化の違う人々と否が応にも触れ合うことで、考え方にも感じ方にも思っていた以上に変化がありました。ようやく生活にも慣れ、研究も軌道に乗ってきたところでの帰国となり残念ではありますが、設備の整ったところでの充実した研究生活を通し、夫の仕事の幅も少しは広がったのではないのでしょうか。

今回の研究留学で日本ではできない数々の貴重な経験をさせて頂いたこと、この場を借りて深く感謝し、この体験記の結びとさせていただきます。